

のままです。そこでさらなる情報を求めて、テレビチャンネルをつぎつぎ換えていくと、ありました、ロシア語でニュースを放送しています！

かつてリトアニアもソ連構成共和国でしたが、ホテルのテレビでは 1 局しか視聴できませんでした。しかも事件が起きたあとでもノンキなバラエティー番組なんか流していて、ぜんぜん使い物にならなかったのですが、やっとニュースの時間となりました。ロシア語なら、かなり詳しく理解できるはず。有益な情報を求めて耳を傾けます。ところが頼りのロシア語放送が、とんでもない情報を伝えていました。

「このテロ事件には日本のテロリストが関係しているとの見方があります」

おい！ そんなこと、他のニュースではひと言もいわなかったぞ！！ 冗談じゃない、それじゃ明日、飛行機が無事に飛べるようになったとしても、こっちは日本のパスポートを持っているんだから、念入りに調べられて、場合によったら搭乗を拒否されるかもしれないじゃないか！！

その晩は、よく眠れませんでした。

翌日の午前中は時間があつたので、市内にあるユダヤ・シナゴグの見学に行きました。内心は不安でいっぱいだったのですが、もう破れかぶれです。館内はとても静かでした。それだけでなく、ヴィリニウスの街はいつもと同じように落ち着いています。ホテルは予定どおりにチェックアウトしましたが、フロントもそれまでと変わりなく、にこやかに挨拶をします。日本人テロリストを見る目ではありません。よかった。しかしこの先は何が待っているかわかりませんから、油断は禁物です。

予約しておいたタクシーで、ヴィリニウスの空港には早めに着きました。到着してわかったことには、午後になって飛行機はヨーロッパ便に限り通常運航に戻ったそうで、いやはや、心の底から安堵しましたね。

落ち着いて辺りを見回せば、空港内はガランとしています。もともと便数が少なかったようですが、そこへさらにキャンセル便が出たからでしょうか、利用客も非常に少なく、その静けさは不気味なほどでした。わたしたちの乗るプラハ便は、定刻どおりと表示されています。でもまだ安心できません。出国手続きを済ませ、荷物検査を受け、搭乗口に着いてもまだ不安。飛行機が飛び立って、ヴィリニウスの街を窓から見下ろしてはじめて、わたしとカミさんは安堵のため息をつきました。

数時間後に飛行機は無事にプラハへ到着しました。ここは何度も訪れている慣れた街だし、何かあったらチェコ語を使って対処することができます。数日間滞在する間に、各国の空港も徐々に落ち着きました。

わたしたちがチェコから日本に向けて離陸する日は、アメリカに向けて飛行機が飛ぶようになった初日でした。当時は

それほど利用客の多くなかったプラハの空港で、搭乗手続きのために並ぶ行列があんなに長かったのは、後にも先にもそのときだけです。

あのとき以来、ヴィリニウスはまったく訪れていません。わたしのリトアニア語も錆びつく一方です。また行きたい気持ちもありますが、あのときの混乱を思い出すと、リトアニアに限らず、飛行機に乗るのが不安になってしまいます。世界を変えた、本当にひどい事件でした。それにしても、ロシア語ニュースの誤報はいったい何だったのでしょうか。

~~~~~

## <日口交流情報>

### 大阪日口協会が定期総会（3月7日） 新理事長に五十嵐徳子さん

3月7日、大阪日口協会の第47回定期総会が、大阪市内の会議室で開催されました。

総会では、25年の活動報告・26年の活動計画が承認されるとともに、昨年4月に藤本和貴夫先生が逝去され空席となっていた理事長に、五十嵐徳子さん（京都外国語大学教授）が選出されました。日口の学術交流、文化交流に尽力された藤本先生の遺志を継ぎ、大阪日口協会の活動をより活発化させていきたいと、五十嵐新理事長は決意を述べました。

総会後の講演会では、ロシア・ウクライナ・旧ソ連地域の現代政治史に詳しい松里公孝先生（東京大学名誉教授・上海外国語大学特別招聘教授）が、「ウクライナ戦争の原因と現況そして『トランプ停戦交渉』の行方」と題して講演。ソ連末期の分離紛争とその停戦管理の分析から紐解いて、ロシア・ウクライナ戦争の現況と見通し、その困難点が、わかりやすく解説されました（講演録を12頁に掲載）。



3月7日、大阪日口協会総会後の講演会



## 天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち 15 周年記念コンサート／東京、大阪

ロシア国立モスクワ音楽院で声楽を学んだ天野加代子さんが、ロシアから演奏家仲間を招聘して開催してきたコンサートが今年 15 周年を迎えました。天野さん（メゾソプラノ）とアレクセイ・コサレフさん（テノール）による記念のコンサートが、3月14日大阪のロシア総領事館、3月18日東京のロシア大使館で開催されました。

個人の方でこのようなコンサートを毎年開き続けるのは並大抵のことではありません。日ロの文化交流が、文化芸術を愛する人たちの地道な努力の積み重ねによって支えられていることを、印象付けられるコンサートでした（写真は、在大阪ロシア総領事館、3月14日）

## エゴール・ペローエフ監督の新作『人形』 監督と主演女優が来日し「特別上映会」



ロシアで人気を博したけれど日本ではあまり知られていないソ連・ロシア映画を発掘し、日本語字幕を付けて上映活動を続けている Ace Square（守屋愛さん）のロシア語映画発掘上映会。その『番外・特別上映会』（＝なんとロシアの人気俳優エゴール・ペローエフ氏が監督として初めて制作した作

品『人形』の上映会）が、5月11日、来日した監督と主演女優アンナ・パンクラートワさんを交えて、東京都港区の札ノ辻スクエアで開催されました。たまたま観光で来日する予定だったペローエフ監督が、せっかくだから自作の上映会ができないかと日本の友人に相談したところ、うまく守屋さんの「発掘上映会」と繋がり、ロシア文化フェスティバルの協力も得て、今回の特別上映会となったもの。

守屋さんが独力で始めた上映会は、その積み重ねの中で次々と新しい動きを作り出し、まさに「継続は力なり」を証明する広がりを見せています。



## 新宿文化学園でロシア美術学生の作品展 モスクワ芸術工科大学(MHPI)訪日団

4月13日～17日、新宿の文化学園大学でロシアの美術学生たちの作品展が開催されています。モスクワ芸術工科大学（MHPI）のシャフィコフ教授が2022年から学生たちを引率して来日し、展示会を開催しているもので、今回で3回目。新宿文化学園での作品展は今回が初めてで、同じアートやファッションを勉強する日本の学生たちに観てもらえると、27



名（うち学生20名）が4月11日から来日し、自作のイラストやスカーフ、プレート、ニットドレスなどを展示しました。なお、一行は、来日中、東京、箱根、京都の観光も楽しむ予定です。

作品展のポスター

# 20 年目迎えるロシア文化フェスティバル

## 10 月、モイセーエフバレエ団が再来日！

ロシア文化フェスティバル IN JAPAN は、2006 年開始以来今年で 20 周年を迎えます。この間、日本各地でコンサートやさまざまなイベントを開催し、音楽、バレエ、演劇、映画など、ロシアの芸術文化の魅力を伝えてきました。今年も 5 月 11 日、銀座ブロッサム中央会館でのオープニング・コンサート（日ロ演奏者による競演）を皮切りに、盛りだくさんのプログラムが予定されています。

詳細は、文化フェスティバル HP でご確認ください。

→ <http://www.russian-festival.net/>

### <文化フェスティバル 2026 の主なプログラム>

#### オープニング・コンサート

5 月 11 日／銀座ブロッサム中央会館

#### ロシアの新星コンサート

5 月 12 日～14 日／東京、横浜、さいたま

デニス・マツエフ ピアノコンサート

6 月 1 日～5 日／横浜、東京、神戸

アレクサンドル・ミッタ 監督追悼映画祭

7 月 7 日／「モスクワわが愛」「未来への伝言」

セルゲイ・ソロヴィヨフ 監督追悼映画祭

7 月 27 日／「白夜の調べ」「エゴール・ブルイチョフ」

サンクトペテルブルグ・フィルハーモニー交響楽団

10 月 17 日～21 日／小田原、東京

モイセーエフバレエ・民族舞踊アンサンブル

10 月 27 日～30 日／新宿文化センター

## 本の紹介

### 未還の名簿

#### ～シベリア最下層捕虜・村山常雄の祈り

青島 顕 著

集英社

定価 2000 円＋税



2020 年から毎年 8 月 23 日

（「シベリアに日本兵捕虜を移送せよ」とソ連・スターリンの秘密指令が出された日）

の夕方から、オンラインでシ

ベリア抑留中に死亡した犠牲者の一人ひとりの名前を 3 日間かけて読み上げる追悼活動が、『シベリア抑留犠牲者支援・記録センター』を中心に多くのボランティアの手で行われている。ここで読み上げられる 46300 人の犠牲者の名簿をたった一人で作り上げたのが村山常雄さんだ（2014 年 5 月、88 歳で逝去）。

自身も極東のハバロフスク地方で 4 年間抑留された村山さんは、帰還後、郷里の新潟県で中学校教員を務め、退職後の 1996 年、70 歳になってからシベリア抑留死亡者の名簿作りに着手する。各新聞社や厚生省が収集、整理したカタカナ名簿をベースに、旧ソ連・ロシアが開示した不完全なロシア語名簿を照合し、一人一人の正確な読み方と漢字名を同定、死亡日や死因、埋葬地なども記入して、10 年かけて完成させた（2005 年 8 月ホームページで公開、2007 年『シベリアに逝きし人々を刻すソ連抑留中死亡者名簿』を自費出版）。

この偉業を成し遂げた村山常雄さんとはどんな人なのか。何が村山さんを、名簿作りを通じた犠牲者の慰霊に駆り立てたのか。本書は、「最下層捕虜」としての過酷なシベリア抑留体験と帰還後の歩み、名簿作りの苦闘を丹念な取材でとり、名簿作りに込めた村山さんの思いを見事に描き出している。『MOCT～「ソ連」を伝えたモスクワ放送の日本人』で開高健ノンフィクション賞を受賞した著者の受賞後第一作。

是非、多くの人に読んでいただきたいと思う。（F）



## 悪党たちのソ連帝国

池田 嘉郎 著  
新潮選書  
定価 1750 円+税

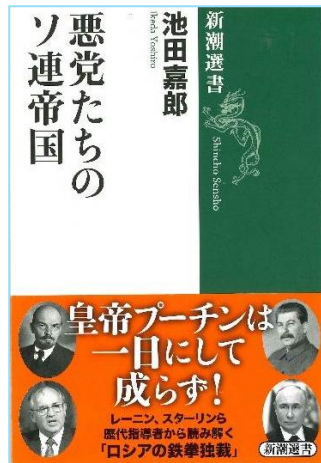
ちょっと奇抜な題名だが、内容はいたって真面目。1917 年から 1991 年まで存在した社会主義国家ソ連の歴史を、レーニン、スターリン、フルシチョフ、ブレジネフ、アンドロポフ、ゴルバチョフまで、「悪党列伝」に模して人間臭いエピソードも交えながら描いた一般向け歴史書である。

プロローグで、同じメロディで歌詞だけが書き換えられたソ連とロシアの国歌の遍歴にふれて、「ロシア・ソ連の歴史に関して、二つの点で示唆的」だと、著者は言う。①「強力な最高権力者の遺志が、歴史のコースの変遷を定めていた」、「しかもその変遷は、頻繁に大きなジグザグを描いた」。②「歴史のジグザグにもかかわらず、何らかの連続性が浮かび上がってくる」。このソ連史におけるジグザグと連続性を、強力な意思によって国を統治した 6 名の人物を通して描いたのが本書というわけだ。

「ソ連とは、強力な指導者のもとに統合された巨大な共同体であった」。「統治者が法の上に立っている点、それにくわえて、広大な領域と多様な住民集団をもつ点をもって」ソ連は 20 世紀の帝国であった（エピローグより）。ソ連帝国の後継国家である現在のロシアにも当然、その特徴は引き継がれており、「悪党列伝」の最後には、ロシア大統領・エリツィンとプーチンの横顔を簡潔に描かれている。

個人的には、ソ連史でよく取り上げられる革命後からスターリン、フルシチョフの時代、またゴルバチョフ時代の記述よりも、ソ連社会が相対的に安定し一定の豊かな市民社会が形成されたブレジネフ時代と、その下での経済停滞と社会規律の弛緩を打破しようと改革に着手したが十分な成果を上げられないまま病死したアンドロポフの時代を、大変興味深く読んだ。そこにゴルバチョフが「ペレストロイカ」（ソ連社会の立て直し）に挑んだ原因も、しかし改革が行き詰まりついにはソ連そのものが崩壊した要因も、ともに内包されているように思うからである。

ともあれ、ソ連から現在のロシアにつながる歴史の流れを通史として理解する参考書として、ロシアに関心のある学生や若い人に（また、古い歴史知識でソ連・ロシアを固定的に捉えてきた中高年の世代にも）、是非読んでいただきたい一書である。（F）



## 現代戦争論

### —ロシア・ウクライナから考える世界の行方

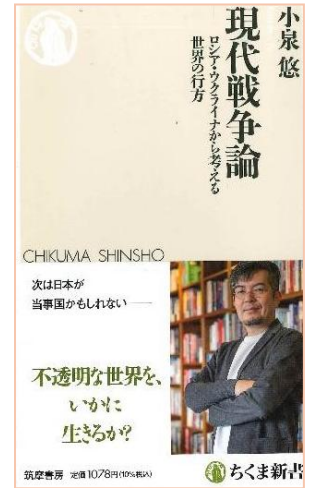
小泉 悠 著  
ちくま新書  
定価 980 円+税

ウクライナ戦争はこの 2 月で 5 年目に入った。当初、ブラハの春を制圧したソ連・ワルシャワ条約機構軍のように短期決戦でキエフ政権のすげ替え（非軍事化、非ナチ化）を狙ったプーチン政権の狙いは完全に外れ、戦争は長期化・泥沼化した。

「ロシア側は戦場では優位に立ちながらも、ウクライナを屈服させるような勝利を収めることができていない。多大な犠牲を出している割にロシア軍の進軍速度は非常に遅く」、「他方、ウクライナがロシアを実力で領土内から追い出すことが困難であろうことを考えるならば、軍事力だけでこの戦争にケリをつけることは双方ともにできない可能性が高い」と著者は見る。そこから、この戦争がなぜこれほど長引いているのか、軍事戦略理論からの詳細な分析が行われる。併せて、この戦争によるロシア軍、ウクライナ軍双方の死者数の推定や、戦争が長期化する中でプーチン戦時体制の特徴（「ソフトな」対内政治戦線）とロシア国内状況の変化（「死」の経済学）などが丁寧に読み解かれる。

ウクライナに侵攻したロシアのみならず、ベネズエラに侵攻し、さらにイスラエルとともにイランへの軍事攻撃を開始したアメリカを含めて「力の論理」がまかり通る世界では、「多極世界」という古典的な大国間協調＝地域覇権国による帝国主義的な勢力圏の形成が進むと筆者は分析している。その中で、日本はいかにロシアと向き合うべきか？ 軍事専門家としてもっぱら軍事対応策を考えるのは仕方がないとはいえ、著者の言う「日本自身の抑止力の強化」と「対ロ外交の凍結」には必ずしもすべては賛成できないが、ウクライナ戦争後の世界と日ロ関係を考える上で、本書が有益な材料を提供していることは間違いない。

戦争を続けるロシアに対してきちんと自らの考えを述べる著者を、ロシア政府は昨年 11 月に入国禁止対象者に指定した。考えの違いや批判はあっても、思想や言論、ましてや学術研究を行政的に排除しようとすることは、正しい行いではないことを付言しておきたい。（F）



3月7日、大阪にて「ウクライナ戦争の原因と現況そして『トランプ停戦交渉』の行方」と題して、ロシア・ウクライナ・旧ソ連地域の現代政治史に詳しい松里公孝先生（東京大学名誉教授・上海外国語大学特別招聘教授）の講演会が開催されました（主催；大阪日ロ協会）。講演では、ソ連末期の分離紛争とその停戦管理の分析から紐解いて、ロシア・ウクライナ戦争の原因と戦争目的の変化、『トランプ停戦交渉』の問題点がわかりやすく解説されました。

以下、大阪日ロ協会と松里先生の了解を得て、講演録を掲載させていただきます（編集部）。



## 大阪日ロ協会 講演会／3月7日

# ウクライナ戦争の原因と現況、 そして『トランプ停戦交渉』の行方

松里 公孝（東京大学名誉教授／上海外国語大学特別招聘教授）

### はじめに

講演テーマは「ウクライナ戦争の原因と現況そして『トランプ停戦交渉』の行方」ですが、近く名古屋大学出版会から『旧ソ連の分離紛争—なぜ起こるのか、どう管理するのか』という本を出版しますので、本日はその内容を抜粋しつつ、ロシア・ウクライナ戦争についてお話ししたいと思います。

講演の内容としては、まず一番目に、プーチン大統領があげる露ウ戦争の原因を検討します。原因の1つはドンバス紛争管理の失敗です。プーチンは「ドンバスでジェノサイド（集団虐殺）が行われている」と言うのですね。ジェノサイドという言葉が適切かどうかは別として、ドンバス紛争管理が全く失敗したことは誰も疑問がありません。もう1つの原因はNATO（北大西洋条約機構）の拡大問題です。プーチン大統領はNATOの東方拡大がけしからんと言っているわけで、その二点を検討したいと思います。

二番目は、この戦争の経過と戦争目的の変化です。「特別軍事作戦」の最初の狙いは、おそらくトランプがベネズエラに対してやったように、電撃戦でキエフに侵攻して、ゼレンスキーを屈服させるか、辞めさせるかして、ロシアの言いなりになる人物を指導者につけようという発想でした。しかし、それが見事に失敗して、戦争は長期化したわけです。この4年間でロシア軍の将兵だけで死者が20万人近いと言われて

います。大変な犠牲者です。これは私の考えですが、そこからやはり領土の拡大が前面に出てきたのだと思うのです。「ウクライナのNATO加盟を阻止した」「ドンバス問題を解決した」というだけでは、これだけの犠牲が正当化できるのかという話になる。そこで領土の拡大というのが国民には一番わかりやすいし、遺族の感情にも訴えやすいということだろうと思います。

三番目は、停戦交渉の見通しです。これは非常に見込み薄である。何故かと言うと、ロシアもウクライナも、また調停に入っているアメリカも、誰もスタンダードな停戦を望んでいないからです。詳しくはこのあとお話ししますが、以上の三点が本日の講演の概略です。

## I. プーチンがあげる露ウ戦争の原因

### (1) ドンバス紛争管理の失敗

プーチンがあげる露ウ戦争の原因の一つは、ドンバス紛争管理の失敗です。「ウクライナはミンスク合意を守らなかった」、「ドンバスの民間人に対してウクライナはジェノサイドをやった」とプーチン大統領は主張します。これについてこれから検討していきますが、その前に予備知識として、ソ連末期の分離紛争とその紛争管理について見ておきたいと思っています。